

2009年5月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500 hPa 高度場で見ると、ベーリング海上におけるリッジの発達に対応する正偏差が顕著だった。対流圏下層では、ベーリング海上におけるリッジの発達に対応して顕著な高温偏差が、カナダ北部からグリーンランド南海上では顕著な低温偏差が見られた。北半球の亜熱帯ジェットは、西半球側において低緯度の亜熱帯ジェットと50°N 帯の寒帯前線ジェットの分離が明瞭で寒帯前線ジェットは極寄りに位置した。高周波擾乱の活動は、西シベリアからカムチャツカ半島にかけて平年よりも活発で、特に中央シベリアから東シベリアにかけて非常に活発だった。北太平洋のストームトラック域では、東部で平年より不活発だった。北大西洋では、平年より極寄りに位置して平年より活発だった。

熱帯の対流活動は、ベンガル湾からフィリピン東方にかけてと、インドネシア、オーストラリア北部で活発だった。また、ブラジルから大西洋赤道域にかけては対流活発域が平年より南偏した。太平洋赤道域では不活発だった。対流圏下層では、ベンガル湾から南シナ海にかけての10°N 帯と、フィリピンからハワイにかけての20°N 帯で西風偏差が明瞭に見られた。赤道季節内振動 (MJO) に伴う対流活発な位相は、5月初めに西部太平洋から西半球へと東進したが、その後東進は不明瞭となった。西・中部太平洋赤道域下層の

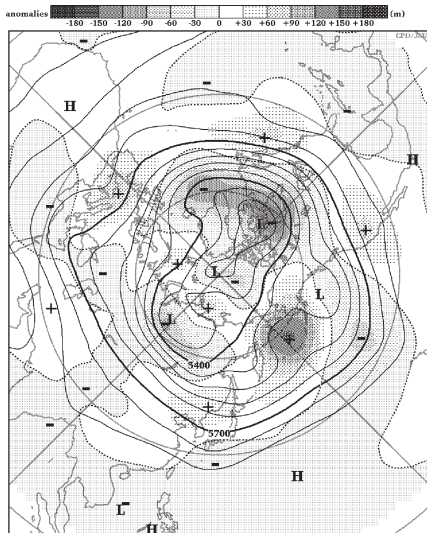
東風偏差は前月より弱まった。南方振動指数 (SOI) は-0.5と、2008年5月以来1年ぶりに負の値となった。

世界の天候

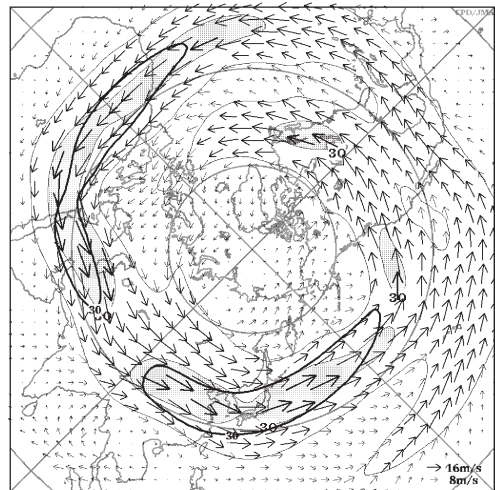
2009年5月の世界の月平均気温平年差は+0.28°Cで、1891年の統計開始以来、5番目に高い値となった。5月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.66°C/100年である。

- フィリピンでは、台風第1号と第2号が相次いで接近し、80人以上が死亡したと伝えられた (フィリピン政府発表資料による)。
 - ヨーロッパ西部では、高気圧に覆われることが多く、異常高温となった。
 - ブラジル東部では、対流活動が平年より活発で、異常多雨となった。
 - ニュージーランド周辺では、南極からの寒気の影響を受けることが多く、異常低温となった。
- (気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

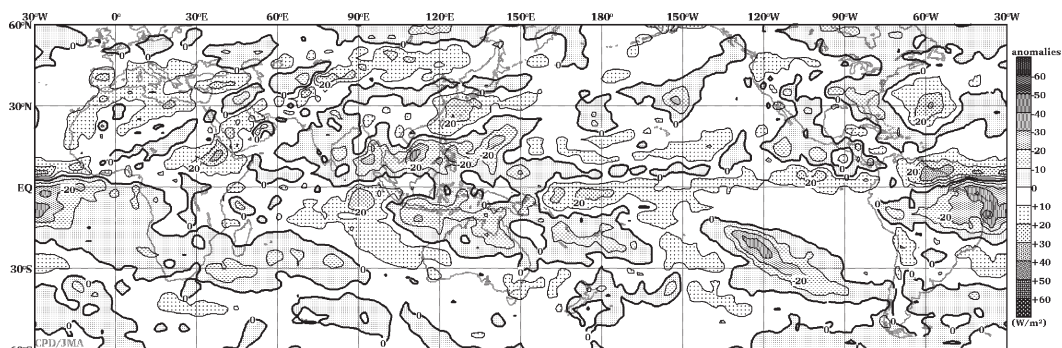
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



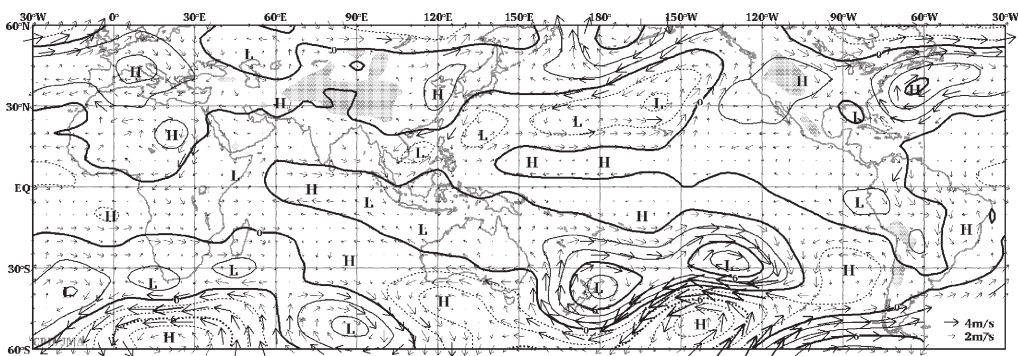
2009年5月の北半球月平均500 hPa 高度および平年偏差
 等値線間隔は60 m, 陰影は平年偏差。平年値は1979~2004年のデータから作成。



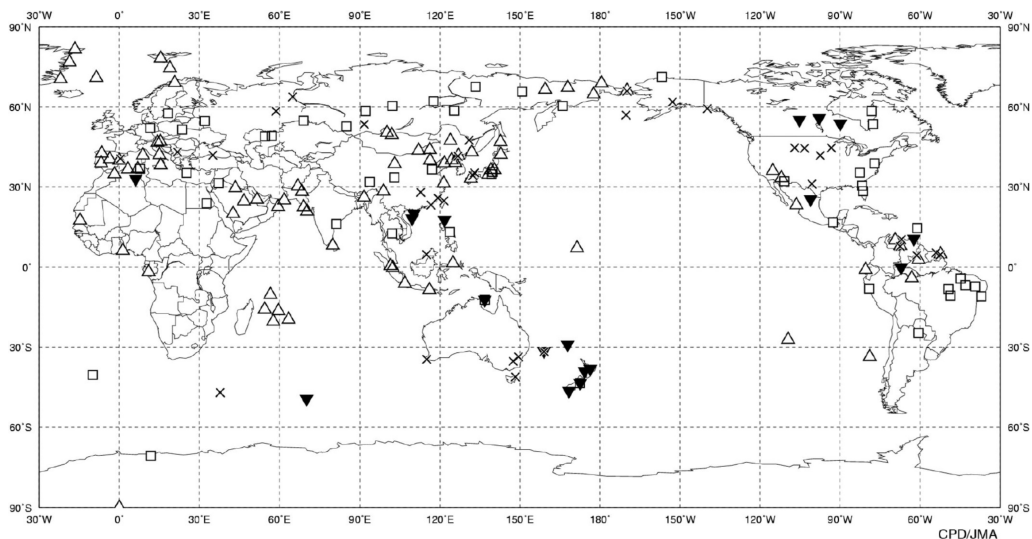
2009年5月の北半球月平均200 hPa 風速および風ベクトル
 等値線間隔は15 m/s, 陰影部は30 m/s以上。太実線で囲まれた領域は平年の30 m/s以上の領域を示す。平年値は1979~2004年のデータから作成。



2009年5月の月平均外向き長波放射量年偏差
 等値線間隔は10 W/m²で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。元データは NOAA、年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2009年5月の月平均850 hPa 流線関数年偏差および風年偏差ベクトル
 流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1979~2004年のデータから作成。



2009年5月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
 異常高温・低温は標準偏差の1.83倍以上、異常多雨・少雨は降水5分位値が6および0。